

原 著

ミルトンにおける死 (4)

—— *Lycidas* を中心に ——

武 村 早 苗

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成10年11月11日受理)

Death in Milton (4)

—— *Lycidas* as a pastoral elegy ——

Sanae TAKEMURA

*Department of Medical Social Work
Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Accepted Nov. 11, 1998)*

Key words : *Lycidas*, pastoral elegy, King, death

Abstract

John Milton wrote *Lycidas*, a pastoral elegy, for his friend, Edward King, who died at 25. The plan is to compare *Lycidas* with *The First Idyl* by Theocritus and to discuss why Milton adopted this style for *Lycidas*.

要 約

ミルトンは大学時代の同窓生 Edward King の死を悼んで、パストラル・エレジーの形式を用いて「リシダス」を書いた。最初に「リシダス」とテオクリトスのパストラル・エレジーである「牧歌 I」を比較し、次になぜミルトンがパストラル・エレジーの形式を採用したかを論ずる。

はじめに

今回はミルトンの学友であった Edward King に捧げられた悲歌 *Lycidas* (1638) を取り上げる。

Lycidas より以前に書かれた追悼詩の対象は、大学の副総長や儀式担当者、主教たち、幼女そして侯爵夫人であった。*Lycidas* において初めてミルトンは彼と同窓の、はるかな前途をもつ青年

の死を題材にしたのである。彼は King の人生に自分の人生を重ねて、あれこれと思い巡らしたことであろう。この詩には、以前の追悼詩には感じられなかったような緊張感やエネルギーが存在する。この小論において、筆者は、King の死を描く際に、なぜミルトンが postoral elegy の形式を用いたかを考察したい。

1

Edward King (1612—1637) はアイルランドのコンノート州で生まれた。イギリス人の家庭で育ったが、父親がアイルランドを治める高官であったため、アイルランドと縁があったと思われる。14歳でケンブリッジの Christ College に入学した。いくつかの学問において優秀であり、ラテン詩も書いている。卒業後も Fellow として大学に残り、将来は聖職につく予定であった。1637年8月10日アイルランドに向って航海中、King を乗せた船が難波し、彼は帰らぬ人となった。25歳であった。King の最後は次の記事に詳しい。

“the ship in which he was having struck a rock not far from the British shore and being ruptured by the shock, he, while the other passengers were fruitlessly busy about their mortal lives, having fallen forward on his knees, and breathing a life which was immortal, in the act of prayer going down with the vessel, rendered up his soul to God, Aug. 10, 1637, aged 25” [Masson’s translation].¹⁾

King の追悼詩集は二部から構成されており、第一詩集にはラテン詩が20篇とギリシャ詩が3篇掲載され、第二詩集には英詩が13篇載せられた。そのうち *Lycidas* が最も長い詩で、詩集の最後を飾っている²⁾。ミルトンは King より5歳年長であった。二人は特に親しい友人という関係ではなかったけれども、全学生を合わせても260名ほどの Christ College では、誰もが顔見知りであっただろうと推察される³⁾。

ミルトンはケンブリッジ卒業後、両親のいる Horton の村に移り住んで5年目であり、「半ば隠遁者のように読書と思索にふける日々」⁴⁾を送

っていた。*Lycidas* は Horton 時代の終り頃、彼の29歳の誕生日の一ヶ月前に書かれている。

2

リシダス (*Lycidas*)

この哀悼歌において、作者は、1637年チエスターよりの航行中、アイルランド海上で不運にも水死した博学の友を悼み、ついでに当時全盛であった、わが教会の牧師らの破滅を予言する。

もう一度、汝ら月桂樹よ、今一度
 汝ら暗い色したミルテと緑たえぬ蔦よ、
 汝らの粗く未熟な実をぼくは摘みに来たのだ。
 心ならずも無礼な指で
 熟する時も待たず、汝らの葉を散らす。 5
 にがい束縛と悲しい出来事がぼくを強いて
 汝らの季節を乱させる。
 リシダスが死んだからだ、盛りも待たず
 死んだのだ、若いリシダスが、^{あと}後に続く者もなく。
 リシダスのために歌わない人があろうか。 10
 彼もまた歌う術を知り、気高い詩歌を築きあげた。
 水の棺に彼を漂わせてはならぬ。
 泣かれもせず、焼けつくような風にまみれて
 弔いの詩という報いもなしに。
 いざ始めよ、ジュピターの玉座の下から 15
 わきいでる聖なるミュージズたち、
 始めよ、いくぶん高音に弦をかき鳴らせ。
 むなしい拒絶や引っこみ思案の口実はやそう。
 そうすれば、だれか心やさしい詩人が
 ぼくの運命の骨壺に幸ある言葉を投げかけて 20
 通りがかりにふりむいて
 ぼくの黒い経帷子に冥福を祈ってくれるだろう。
 ぼくたちは同じ丘で育ち、同じ羊の群れを
 泉や木蔭、^{こかげ}小川のほとりで飼っていたのだから。
 開きゆく朝の^{まがた}暁のもと 25
 まだ草地在現われてこぬうちに
 ふたり一緒に野に羊を追い、ふたり一緒に
 甲虫の吹きならず暑苦しい角笛を聞き
 さわやかな夜露を羊たちにあたえた。
 夕空に輝く明星が、西向きの車輪を 30
 傾けるほどの、時刻になったこともある。
 そのあいだには麦笛にあわせて、

- 田舎の民謡が歌われた。
粗野な羊獣神らが踊れば、蹄の割れた
牧神らも楽しい響きに誘われた。 35
ダミータス老人もぼくらの歌が好きだった。
だが、おお、ひどい変り様、君はもういない。
行ってしまつて二度と帰らない。
君よ羊飼、君を偲んで、この森が、野生の
たち麝香草や蔦の生い茂る人気なき洞穴が、 40
そこに宿るこだまもみんな悲しんでいる。
柳や緑のハシバミの森が
君のやさしい歌にあわせて
喜びの葉を揺らすのも、もう見られはしない。
バラをむしばむ尺取虫、 45
草食む子羊の群れに伝染る毒虫、
さんざしが咲きそめるころ
あでやかに着飾つた花たちに降りる霜、君の死は、
リシダス、それほどの衝撃だ、羊飼の耳には。
どこにいたのかニンフたちよ、無慈悲な海が 50
汝らの愛したリシダスの頭上に閉じたとき。
かの古代詩人、名にしおうドルイド僧が眠る
断崖にも、うっそうとしたモーナの頂きにも
ディー川の奇しき流れのほとりにも
汝らのたわむれる姿はなかった。 55
ああ、愚かしい夢をみたものだ
汝らがそこにいたとて、何ができただろう。
オルフェウスを生んだミューズの女神ですら
あまねく自然が哀悼した、音楽で魅する
息子のために何ができたというのだ、 60
わめき狂つた女たちによって
彼の血みどろの顔が流れにのつて、ヘプロスの
急流からレスボスの浜辺に着いたときに。
ああ、何の役にたつのか？ たえず気を配つて
質素で人に軽んじられる羊飼の業にはげみ 65
恩知らずの詩神にひたすら思いを寄せても。
他の羊飼がいつもしているように
こかげでアマリリスとたわむれ
ニエラの髪をもてあそぶ方がましではないか。
名声（気高い心に宿る最後の弱点）は 70
清い心を駆りたて、快樂をさげすみ
労苦の日々を送らせる拍車である。
だが、その素晴らしいほうびを心に望み
パッと輝く光の中へ飛びだそうとするとき
盲目の運命がゆゆしきはさみを手に現われ 75
- はかない人生をたち切るのだ。「だが称讃は
たち切らぬ」とぼくのふるえる耳に詩神の声、
「名声とは地上に育つ草木ではない。
それはキラキラ輝く箔の中にも
ひろく流れる噂の中にもなく、全てを裁く 80
ジュピターの清い眼と完全な証しによって
高きにあつて栄えるもの。人の業に
主神が最後の裁決を下すとき、彼の言葉こそ
天において報われる名声と信ぜよ。」
おお、アレシウザの泉よ、葦の音鳴つて 85
柔らかにすべりゆく貴い川、ミンシウスよ、
詩神の調べは汝らよりも厳かであった。
ともあれ、ぼくは麦笛を吹きつづけ
海神に遣わされた
海の使者に耳傾ける。 90
彼は波にたずね、むごい風にただした。どんな
災いが、この気高い若者を不運にしたのかと。
とがった岬から吹きつける
荒くれた翼の突風にもたずねたのだ。
が、風たちはまるでおぼえがない。 95
聡明な風神が答えた
「私の洞窟から迷い出た一陣の風もない。
空はおだやかで、海は凪いで
海の精が姉妹たちと遊んでいた。」
君の神聖な頭をふかく沈め去つたのは 100
日食に造られ暗い呪いに纏装された
あの裏切りの、あの宿命の船なのだ。
次にキャム川の父ケーマスがゆっくりと
歩いてきた。毛ばだったマントに菅の帽子で、
おぼろな模様のぬいとりがあり、へりには 105
あの血にぬれた花に似た、「哀」の字がついていた。
「おお、わしの最愛の子を奪つたのは誰じゃ。」
最後に現われ、最後に去つたのは
ガリラヤ湖の水先案内、聖ペテロである。
手にもつは二つの重々しい鍵 110
（黄金の鍵は開き、鉄の鍵はしかと閉ざす。）
司教冠をつけた髪をふって厳しく語つた。
「若者よ、私欲のために羊の檻に這いより、
押し入り、よじ登る者たちを
存分におまえの代りに死なせたかつた。 115
彼らの心にある事は唯ひとつ、
如何にして刈入れの宴に割りこむか、
如何にして立派な正客を追い出すか。

盲いた口ども！ 羊追う杖のもち方も心得ず
 忠実な羊飼が知るべき技術^{わざ}を 120
 いささかも学ばなかった者ども！ 事足らぬ
 何があるか。彼らはすでに満たされている。
 気がむけば、みすばらしく味気ない歌が
 弱々しくかすれる麦笛にきしみ、
 飢えた羊は見あげるが、餌^{えき}はもらえず 125
 風でふくらみ、毒露を吸い、
 身内より腐り、疫病をまきちらす。
 それに、狂暴な狼が、忍び足で、日ごとに
 さっさと貪^{むさぼ}り食っても、何も言われない。
 だが門に立つ両刃の剣が 130
 一撃を、止めの一撃を用意しているのだ。
 戻ってくれ、アルフェウス、汝の流れを
 ひるませた、あの恐ろしい声は去った。
 戻れ、シシリーのミューズ。谷間を呼べ、
 鈎鐘草や色とりどりの花をここへ手向けよと。 135
 汝ら低き谷よ、木蔭と気紛れ風と元気な小川が
 やさしく囁きかわし、日やけたシリウスの
 視線も深くは届かぬ、すがすがしい谷間よ。
 ここへ投げよ、緑の芝生で密の雨を吸った
 エナメルの様なきれいな花を。 140
 春の花で大地を紫にそめてくれ。
 日蔭で死ぬ早咲きの桜草、
 つどい咲くきんぼうげ、色白のジャスミン、
 純白のなでこ、黒い斑入りの三色すみれ、
 まばゆいすみれ、 145
 匂やかなバラ、
 うなだれて憂い顔の九輪桜、
 悲しげな飾りのすべての花を持っておいで。
 アマランスには美しさをすべてふりまくよう、
 水仙には花の杯^{カップ}を涙で満たすよう告げよ。 150
 リシダスの横たわる月桂樹の枢に散らすために。
 こうして東の間の安らぎを得るために
 いたずらな物思いはかなくも戯れるのだ。
 ああ、その間にも岸辺や轟く海が
 君をはるか遠くへ押し流している。君の骨が 155
 打ち上げられる所へ、荒海のへブリディズ諸島の
 かなた、おそらくは逆巻く波の下、君は
 底深く異形のもの住む国を訪れているのか、
 それとも、ぼくらの涙ながらの祈りも届かず
 君はあの伝説の老人ベララスの許に眠るのか。 160
 その山を守りつつ、ナマンコスとバヨーナの

砦^{かた}の方を見つめる大いなる天使の幻影。
 天使よ、今は故郷を望め、そして歎きに溶けよ。
 おお、イルカたちよ、不運な若者を運べ。
 もう泣いてはならぬ、悲しみの羊飼たち、 165
 汝らの悼むリシダスは、たとえ
 水の底に沈んでも、死んではないのだ。
 太陽もまた大海の底に沈むけれども、
 ただちに、うなだれた頭をいやし、
 光を調べ、新しい金色の輝きをもって 170
 朝空の額に燃えあがる。そのように
 リシダスも低く沈んだが、高きに昇った、
 波の上を歩いたお方の、尊い力によって。
 そうして別の森かげ、別の流れのほとりに、
 ぬれた髪を清いネクターで洗い、 175
 歎びと愛の柔和な幸せの王国に
 えもいわれぬ祝婚の歌を聞いているのだ。
 聖徒たち、厳^{おごそ}かにやさしく群れつどって
 歌い、歌いつつ栄光の中に舞い、 180
 彼の眼より永遠に涙をぬぐいさる。
 さあ、リシダスよ、羊飼たちはもう泣かぬ。
 君への大きな報酬^{むくい}として、今後の君は
 岸辺の守り神、危険な海をさまようもの
 すべてを親切に導くのだ。 185
 素朴な羊飼は榎や小川にこう歌いかけた、
 静かな朝が灰色のサンダルと共に消えゆく間に。
 さまざまな葦笛の微妙な窪みに触れつつ
 ひたむきな思いをこめ、田舎の牧歌を歌った。
 日はやがて山々の影を伸ばしつくし 190
 いまや西の入江に身をひたした。
 若者はついに立ち上り、青いマントをはおった。
 明日はいざ、あらたな森、あたらしい牧場^{まきば}へ。

3

Lycidas は pastoral elegy という形式を用いて書かれている。pastoral elegy とは、ある設定された牧歌的風景の中で、一人の羊飼がもう一人の羊飼の死を嘆いて歌う歌のことである。pastoral elegy の伝統は BC 3 世紀前半のギリシャの牧歌詩人テオクリトスに溯る。彼は「田園詩の父」と言われている。テオクリトス流の田園詩から出発して、それを洗練し、都会風の世界を創り出したのがローマの詩人ウェルギリウス (70—19BC) である⁵⁾。まず、原初の pas-

toral elegy が如何なる要素で成り立っているかを知るために、テオクリトスの作品 *The First Idyl*⁹⁾ の構成を分析してみよう。

I *Idyl*

羊飼サーシス (男) は山羊の番人にせがまれて、仲間の羊飼ダフニス (男) の死を悼む歌を歌うことになる。ダフニスの死の経緯は次のようである。最も美しいニンフと結婚したダフニスは、自分の愛情に自信があったので、愛の女神の誘惑には負けるはずがないと自慢していた。女神は一人の乙女を遣わして、彼を誘惑しようと試みたが、ダフニスは女神のたくらみに屈せず、むしろ死を選んだ。

サーシスの歌

リフレイン 詩神への呼びかけ

- 1 ダフニスを救わなかったことで、ニンフたちが非難される (歌い手によって)。
- 2 ジャッカル, 狼, ライオン, 雄牛, 子牛がダフニスの死を悲しんで鳴く。
- 3 ヘルメス神, プリアプス神 (羊や山羊の守護神) と牛飼, 羊飼, 山羊飼たちがやって来てダフニスを慰める。
- 4 愛の女神もやって来てダフニスを嘲笑する。
- 5 ダフニスは女神に悪態をつき, さらに彼女の勝利を吹聴せよと言り返す。
- 6 動物たちや森や川に別れを告げる。
- 7 牧神に笛を渡す。
- 8 植物界と動物界における秩序が狂うことを願う。
- 9 ダフニスは流れの下に沈み, 渦巻く波が彼の頭にかぶさる。
- 10 エピローグ

次に *Lycidas* の構成を記してみよう。追悼詩としては長い詩 (193行) なので、内容に従って三つの部分に分けることにする。

Lycidas

I

- 1 詩人の独白 — 自分の未熟な詩を捧げる必要が生じたこと (1—14)

- 2 詩神への祈念 (15—22)
- 3 King と詩人の関係 (23—36)
- 4 森, 洞穴, 植物, こだまが悲しむ (37—41)
- 5 若い動植物の死 (42—49)
- 6 ニンフへの非難 (50—63)
- 7 勤勉な人生に対する懐疑の態度 (64—76)
- 8 名声についてのアポロの忠告 (76—84)

II

- 1 詩神への祈念 (85—87)
- 2 哀悼者の行列
 - イ 海の使者と風の神 (89—99)
 - ロ カム川の主 (103—107)
 - ハ 聖ペテロ (108—131)

III

- 1 川, 詩神, 谷間を呼び, 枢に花を散らすよう依頼する (132—153)
- 2 リシダス (遺体) が流れている場所を想像する (154—164)
- 3 リシダスの復活 (165—185)
- 4 エピローグ (186—193)

4

死を中心に二つの作品を比較してみよう。サーシスの死の原因は恋愛である。愛に対する彼のうぬぼれが女神の怒り=死を招いたのであるから。リシダスの場合、責められるべきは「日食に造られ、暗い呪いに躰装された…宿命の船」(100—101) である。詩人は荒波のせいにも強風のせいにもしていない。牧歌であるゆえに自然を悪者にするのを避けているのであろうか。とにかく King の死の原因が故意に強調されていない感じである。

サーシスもリシダスも水死である。サーシスの死については、歌の最後に簡単に述べられているにすぎない。*Lycidas* においては、それが詩を貫く大きなテーマになっている。たとえば、聖なる泉のほとりの詩神 (15)、海に流されたオルフェウス (58)、ネプチューンの使者 (90)、パノペ=海のニンフ (99)、カム川の主 (103)、ガリラヤ湖のペテロ (109)、イルカ (164)、波の上のキリスト (173) はすべて水に係わる存在であり、リシダスは岸辺の守り神 (Genius of the

shore 183) となって再生する。さらに、川や泉や海が巧みに配置されて、詩全体が水のイメージに満ちている。

Lycidas はめまぐるしいくらい多様な場面から構成されていて、各々の場面はそれなりに一つの出来事として完結している。のどかな牧歌的風景や、山や海についてのスケールの大きい描写の間に、「名声とは何か」、「人生如何に生きべきか」、「真実の牧師とは？」などの哲学的疑問がはさまれている。いつの時代であれ、若者がそれらの答を求めてさまようように、読者も若者とともに、この詩の海を漂うのである。漂いつつ一緒に発見していくのである。発見に至るまでのプロセスを、Daiches は次のように説明している。すなわち、「*Lycidas* においてミルトンは問題の周りをまわっている。まわるごとに彼はその中心に近づいていく (he is spiralling rather than circling). そして解答(あるいは少なくとも落ち着いてその問題に向える態度)を見つけた時のみ彼は中心にたどり着く」⁷⁾

これらの詩にはどちらもエピローグがついている。*I Idyl* においては、歌い終ったサーシスが約束どおり、山羊の番人から立派な木の鉢と雌山羊をもらい、いつか、もっと甘い歌を歌ってあげると告げて、希望を残して去っていく。一方、*Lycidas* では、エレジーを歌い終えた、ミルトンを思わせる田舎の若者は、気を取り直して再出発する様子である。

ついでに述べたいのであるが、以前のエレジーでは、最後にはどの死者も天国に昇り、光の中で復活し、永遠に天上の住人となって崇められるのが常であったが、リシダスはつましく水辺の守護神におさまる。土着の若い羊飼に最もふさわしい待遇のように思われる。

Lycidas に見られる牧歌の伝統は、ニンフたちへの詰問、亡き羊飼を偲ぶ自然の嘆き、羊飼たちの田園生活における仲間意識、個々の哀悼者の行列、そして *I Idyl* には見られなかったが、柩を花で飾ることなどである。しかし、最も大きい牧歌の伝統、というよりもむしろ牧歌の世界の特色は、複数の人物が登場して、たがいに会話をするというのではないだろうか。

自然や神々、ニンフたち、羊飼たち、語り手である詩人＝羊飼、そして死んだ羊飼など、多彩な登場人物が場面ごとに現われて、死者を称讃したり、場合によっては軽蔑したり、その喪失を嘆いたり、愛すべき青年の死という不条理を批判したりするのである。これは、まさにドラマの世界であり、たがいに質問したり、あれこれ論じあえる世界である。

さらに、King とミルトンには共通する部分が多かった。二人は共に同窓生であり、詩人であった。King は牧師の卵であったが、ミルトンも長い間牧師の道に進むべく学んでいたのだった。(途中で彼は詩人の道を選んだが) 彼は King になり代って思う存分発言したかったに違いない。

“One main reason for the very long life of the pastoral convention, both in the elegy and its other branches, was that from the beginning it had been a dramatic mask for any kind of utterance, private or public; behind an established and impersonal pattern and persona, the poet enjoyed complete freedom.”⁸⁾

Bush によれば、牧歌の伝統が長く続いてきた秘訣は、それが元来持っていた仮面的な要素に負うものであるという。仮面(実際のものではなく比喩としての)の下ではどんな発言も可能であったし、一定の枠組みの中で、かえって詩人は完全に自由に創作することができたのである。

「牧歌の伝統を用いることにより、ミルトンは彼の哀悼の気持をドラマ化した。」⁹⁾ 幼な子や侯爵夫人の場合に比較すれば、King の分身を活躍させる可能性は限りなく大きかったであろう。彼は King の経歴を利用して、哲学的発言や宗教的批判をドラマの中に取り入れた。かくして、穏やかな牧歌的情景の中に、詩人の力強いメッセージが入ることになったのである。メッセージの存在については、学者の間で多くの議論¹⁰⁾があるけれども、そのメッセージのせいで、この pastoral elegy が非常に引き締まった、そして内容の深い芸術作品となったことは確かであると思われる。

結 び

テオクリトスの *I Idyl* と *Lycidas* を比較することにより *Lycidas* の特長を捉えようと試みたが、*Lycidas* は構造的にも内容的にも非常に複雑な作品であると感じた。Horton に半ば引退し

ながら、修業に励んでいた詩作の成果が一挙に吹き出したのではないかと思われる。さらに、当時のミルトンには思い悩んだり、腹立たしく思われる事柄が多くあったのであろう。そういう彼のエネルギーがほとぼしするようなエレジーであった。

文 献

テキストとして Bush Douglas (ed) (1965) *The Complete Poetical Works of John Milton*, Houghton Mifflin, Boston を使用した。以後 *Poetical Works* と略する。邦語テキストとして、高橋康也訳「リシダス」(『世界名詩集大成9 イギリス篇I』平凡社, 1959年)と宮西光雄訳「リシダス」(『ミルトン英詩全訳集 上』金星堂, 1983年)を参照した。

- 1) Hunter WB (ed) (1978) *A Milton Encyclopedia*, Associated University Presses, Inc., New Jersey, vol. 5, pp 42—42.
- 2) *Ibid.*, pp 40—40.
- 3) 越智文雄 (1970) ミルトン研究, 同志社大学出版部, 京都, pp 19—19. *Poetical Works*, pp 41—41.
- 4) 小森禎司, 知子 (ed) (1988) *Milton's Sonnets*, 山口書店, 京都, pp 35—35.
- 5) ウェルギリウス, 河津千代訳 (1994) 牧歌・農耕詩, 未来社, 東京, pp 44—44.
- 6) Elledge Scott (ed) (1966) *Milton's "Lycidas"*, Harper & Row Publishers, New York, pp 15—21. 以後 *I Idyl* と略する。
- 7) Daiches David (1971) *Milton*, Hutchinson University Library, London, pp 76—76.
- 8) *Poetical Works*, pp 141—141.
- 9) Williamson George (1960) *Seventeenth Century Contexts*, Faber and Faber, London, pp 141—141.
- 10) *A Milton Encyclopedia*, vol. 5, pp 46—47.